磯子区の堀割川沿いを歩く　資料　2020.11.11 秋山

石油精製工場

① 根岸湾の石油精製工場

根岸駅のホームでまず目に入るのは、ホームに隣接して石油製品を運ぶタンク車のおびただしい列である。根岸の海岸は日本最大規模の精油所であるENEOSの根岸精油所がある。

根岸湾の埋め立て

横浜開港後、陸上交通が活発となり、また西洋野菜の栽培用地のため、昭和初期までに埋め立てが始まった。埋めたのは小規模でしたが、そのつど漁民による埋め立て反対運動が起こった。じつは埋め立て計画は、戦後できたのではなく、昭和16年（1941）に、臨海工業地帯の造成を目的に、根岸湾の本格的な埋め立て計画が横浜市議会で議決された。しかし、戦争のため実現せず、戦後昭和31年（1956）に再び計画が浮上し、国鉄根岸線施設と工場誘致をセットとする根岸湾の埋め立計画が実現した。反対する漁民側も市の発展という大局的見地から反対を断念した。

② 根岸駅前広場にある碑文

根岸湾漁業共同組合は、昭和32年2月25日横浜市が施行する根岸湾110万坪の埋め立てに同意し調印を行った。この事業は横浜市将来の大きな発展のための臨海工業地帯造成という重要な意義をもつものであるが、またこの漁場に依存する漁民にとっては、より以上重大な死活問題であった。したがって利害相反する両者の交渉は困難を極め、実に20年有余の歳月を要したのである。幸いにして横浜市は漁民の意思を充分尊重し、漁民また大局的判断を下すことにより交渉が妥結したのである。今漁村としての長い歴史を顧み、漁民としての誇りある伝統を思い、なお近代的漁業者として強く生きようとした折から、時代の然らしめる所とはいいながら、その魚場を失うことは誠に感慨無量といわなければならぬ。願わくば本組合員の微志が本市発展の基礎ともなれば幸甚である。ここに根岸湾埋め立て起工式の行われた由緒のある地に記念碑を建て、永く後世に伝えようとするものである。

③ 旧外国人遊歩道

安政６年（1859）の横浜開港により横浜に暮らすようになった外国人公使たちは、かねてより土ほこりや雨天時のぬかるみの問題がある道路の改善を神奈川奉行所に対し要望していた。文久２年（1862）に生麦事件が起き、公使たちは安心して歩ける遊歩道や外国人墓地と競馬場の建設を申し入れた。幕府はこの要求を受け入れ遊歩道が建設された。

④根岸八幡神社

創建は543年。根岸八幡神社の縁記によると、根岸の沖合の根岸湾で黄金色の光が輝き音楽を奏でるような音が響き渡った。それが七日間続いたのち、八幡川の近くの浜に光明と妙な音がしてく黒光する像の姿を現した。村の長老は、「これは村を守るために遠い海から来た神様だ」といい、ひとまず村の長の家に安置することにしました。村の人々は、代わるがわる像を拝みにきましたが、その中の子どもが「我は正八幡なり、里民の苦難を救うため千里の浪を漂って来た。着岸した芝原に社を建てて遷すべし」と言い終わると正気を取り戻した。こうして現在の八幡神社が建てられ、根岸村の鎮守として祀られた。

⑤根岸なつかし公園（旧柳下邸やぎしたてい）

明治から大正期にかけて有力商人であった柳下氏によって建設された。大正 12 年の関東大地震で一部倒壊したものの、大部分は損失を免れた。横浜市は建物の寄贈をうけて、できる限り創建当時の姿を復元し、平成 14 年には市指定有形文化財に指定された。館内では堀こたつ、柱時計などの懐かしい調度品や欄間の優美な細工、天井の透かし彫りなどを見ることができ、建物全体が展示品となっている。雛飾りや鎧兜、武者人形などの五月人形を展示する節句のイベントや、夏休みの小学生対象の五右衛門風呂体験などを通じて、大正から昭和初期の暮らしの雰囲気をうかがうことができる。

中央から左が日本建築、右は西洋館

旧柳下邸

昭和 10 年頃の結婚衣装

五右衛門風呂

蔵の中

明治の初めフランス人実業家アルフレット・ジェラールは、横浜元町で日本最初の本格的な西用瓦（フランス瓦）の製造を始めた。ジェラール瓦と呼ばれたその西洋瓦が、柳下邸の改修工事のときに見つかりました。蔵の中に展示されているので、実物をみることができる。

⑥海照寺

本尊は地蔵菩薩。幕末に日本で初めて西洋野菜を作った清水辰五郎の墓がある。

清水辰五郎と西洋野菜　開国とともに国際貿易港となった横浜ですが、もとは半農半漁の小さな村でした。開港後、西洋建築が建ち始め、ガス灯や水道が整備されるなどその変貌は目を見張るものでした。人々の暮らしも牛乳やアイスクリーム、ビール、パンなどの食品からマッチ、セッケンなどの日用品まで西洋文化が入ってきました。その一つが西洋野菜です。当時日本ではダイコン、ゴボウ、サトイモ、ナス、ホウレンソウなどの野菜を加熱して食べていましたが、西洋人は自分たちの食生活に欠かせない西洋野菜の栽培を自給自足的に始めたのです。開校当時横浜居留地に住む英国人のカーティスは、山手方面の豊かな土地で野菜の栽培を始めました。パセリ、キャベツ、カリフラワなどを栽培しました。根岸に住む清水辰五郎、近藤伊勢松、子安の堤春吉、磯子の井野銀次郎、宮崎留五郎らが横浜の西洋野菜の栽培を定着させました。

⑦ **宝積寺**（ほうしゃくじ）

鎌倉時代に開かれたと伝えられている古寺。昭和初期に建てられた総欅（けやき））造りの本堂がみごと。本堂の入口には一本つくりの上り龍・下り龍の彫刻が施され、境内の花々が四季折々に目を楽しませてくれます。

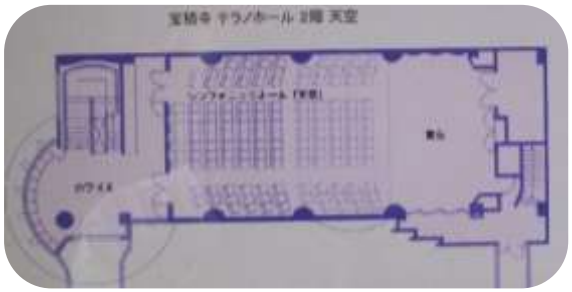
宝積寺

千体地蔵

ホトトギス

テラノホール

お寺（宝積寺）のホールにあるホールなので「テラのホール」かと思ったら、ラテン語の『ＴＥＲＲＡ＝大地、地球のこと』から名がついたホールとのこと。その昔、お寺は町や村の文化の中心で、お芝居を観たり、語り合ったそうです。「現代もそんな場所を作りたい」という思いが、テラのホールのはじまりで音響設計は、サントリーホールを手掛けた永田音響設計が担当。楽器の響き声の美しさを最大限引き出す空間になりました。このホールは、クラシックの巨匠と呼ばれるプロも利用している。



千仏像

供養や回向のため、一つの場所に多数の仏像を並べたりする千体仏は、仏像の千仏思想や俗的には数を増すことで、仏の力を増そうとする発想からきている。鎌倉時代から千体仏像が多数つくられた。

⑧ **堀割川**（明治初期に開削された運河）

堀割川は吉田新田の埋め立てと、港と根岸湾を結ぶ舟運を目的として造られた、全長 2.7km の人工の運河で、明治３年（1870）に開削が始まった。吉田新田を開拓した吉田勘兵衛の子孫や横浜商人によって行われた工事は難工事を極めたが、明治 7 年（1874）に完成した。工事によって切り崩した土砂により、吉田新田の「南一つ目沼」と称された沼地が埋め立てられた。明治期に堀割川沿いに桜が植えられ、桜の名所としても賑わった。また、明治 45 年（1912）には堀割川沿いに、横浜市電の滝頭（たきがしら）車庫が設けられ、昭和 47 年（1972）の市電廃止まで、川沿いを走る市電の姿が見られた。明治初期に開削され、横浜市の水運、治水対策に大きな役割を果たし、長大な石積護岸が当時の面影を残していることが評価され、土木学会推奨土木遺産に認定されている。

川幅を広げる工事

台地を削って堀割川を通した

現在の掘割川

欄干が橋ごとに異なる

堀割川に架かる橋

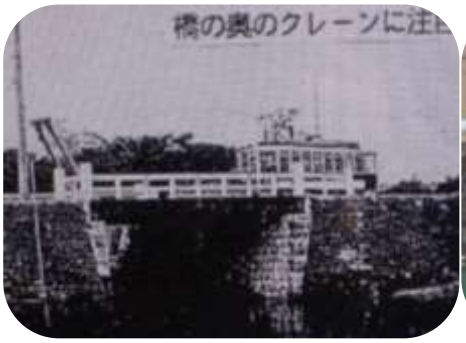
河口橋から八幡橋、磯子橋、坂下橋、根岸橋、天神橋まで５つの橋が磯子区内にあります。この橋をよく見ると橋のたもとの親柱が橋ごとにデザインが異なっています。なかには橋の真ん中に椅子があり休むことができます。

今も残る近代土木遺構

舟運を支えた堀割川には、船から荷物を積み下ろしするための荷上場や階段、船を繋ぐための繋船柱と繋舟環に配置され、運河沿いに木材業、造船所、煉瓦や染め物工場などが建ち並び、運河を行き来する舟で賑わいをみせました。現在も注意して見ると川のいたるところに名残をみることができます。

⑨ ヘルム・ドック跡

堀割川の右岸、坂下橋と磯子橋の間の国道 16 号がすこし盛り上がっている所は、ヘルム・ドックという木造船所の跡で、川に水門が開いている。開港地の外国人居留地にあったヘルム・ブラザーズ商会からきた名前である。



大正時代のヘルムドック

現在のヘルムドック跡

⑩ 捕虜収容所

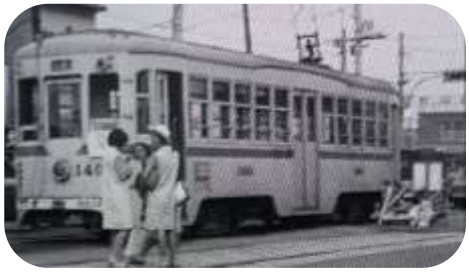
坂下橋と根岸橋の間の「日産」のあるところにあったのが、キリンビールの瓶を専門に製造した工場で、その跡地に明治 34 年「横浜耐火煉瓦製造所」が創業した。横浜港出入りの船のボイラー用の耐火煉瓦、ガス工場のガス発生炉、製鉄所の溶鉱炉壁面などに使われた。それまでの輸入品の国産化をはかったのである。戦後、石炭ボイラーはディーゼル機関に代わり、耐火煉瓦の需要が減って、昭和 36 年に廃業した。あまり知られていないが、太平洋戦争末期にここに「俘虜収容所」があった。戦争中は捕虜でなく**俘虜**といった。

現在の横浜スタジアムに東京俘虜収容所第三分所が開設され、その管轄下にあった。根岸の俘虜収容所は昭和 19 年５ 月 11 日に「第 18 派遣所」として開設され、20 年６月４日に 86 名中 81 名は新潟に５名は本所に移った。所長の少尉はここで空襲時に避難させず労働させたこと、赤十字品の横領、部下の暴力行為の容認、空襲時に避難させずに労働させたことなどで、横浜軍事法廷で戦犯として重労働９年の刑を宣告された。

疎開道路が出来る前の根岸の街

⑪ 横浜市電保存館

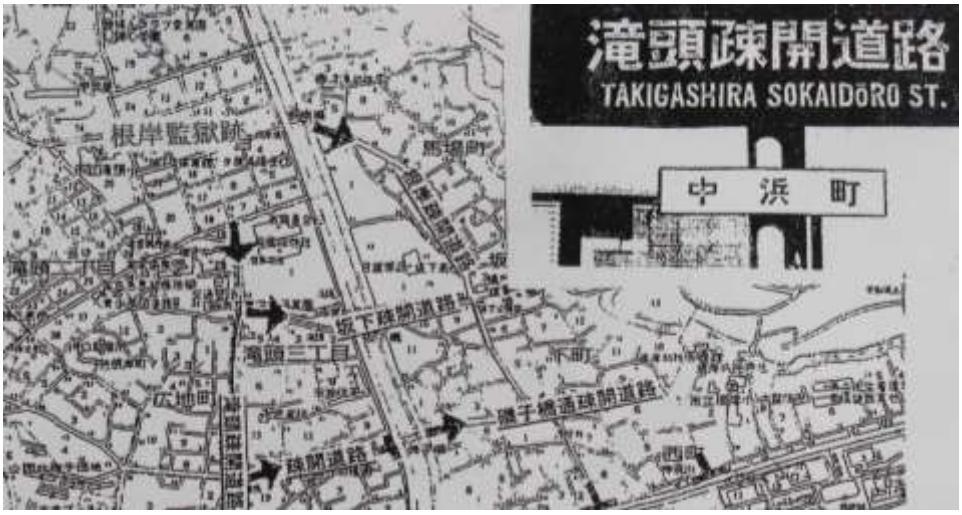
路面電車に関する資料を保存・展示する施設。歴史展示コーナーでは、「横浜の発展と交通」をテーマとして、横浜の発展の基礎となった吉田新田の干拓から、横浜開港、関東大震災、戦後の復興、市電の最盛期を経て廃止に至る経過、その後の横浜の都市計画の基となる６大事業や地下鉄への移行などを分かりやすく解説している。
入館料金　大人 300 円　敬老乗車証所持者 200 円



横浜の市電

疎開道路

「**疎開**」は進撃中の軍隊の距離・間隔を開くこと。集団行動をしている兵を散らし、攻撃目標になり難い状況を作りながら行動を行うこと。空襲や火災などによる損害を少なくするため都市部の住民や産業を田舎へ移動避難させること。**疎開道路**は第二次世界大戦中に空襲による延焼防止を目的に、建物を疎開（家屋を倒し空地にする）して拡張した道路のこと。



根岸監獄と有馬四郎助（近代行刑制度の父）

開港を迎え江戸時代からの「戸部牢屋」は文明開化の時代にそぐわなくなり新しい刑務所が必要になりました。しかし適当な場所がありません。そこで堀割川完成で生まれた新開地（当時の根岸村）に、明治 22 年に近代的な新刑務所（根岸監獄）が完成しました。

ところが建物が完成しても運用の面で新しい発想の持ち主がいません。そこで35歳の若手ながら実績のある誠実なクリスチャン有馬四郎助に初代所長の白羽の矢が当たりました。四郎助は最初から常に愛の心を待って受刑者に接してきましたから、受刑者から慈母のように慕われました。刑務所は罰を加えるだけでなく、「罪を犯した人間を更生させる場である」という信念は、江戸の伝馬町牢役人以来引きずってきた尊大な態度の看守の間に染みわたり、根岸刑務所は全国の刑務所の先進施設になりました。

根岸監獄と吉川英治

「宮本武蔵」「新平家物語」その他数々の名作で国民文学者と称賛された吉川英治の父親、吉川直弘は小田原藩の没落士族でした。当時よくあったように開港で賑わう横浜で一旗揚げようと、小田原を飛び出し山元町に移り住み、明治 25 年に長男として生まれたのが英治です。父親は色々な事業に手を染めますが、商才に乏しい上に生来の短気が災いしてうまくいかず、生活は困難を極めました。英

治は工員、印刷屋店員、横浜ドックの錆び落としなど転々として働き、苦しい家計を支えました。
　まだ英治が小学生の頃、父が事業のことで後援者と喧嘩し怪我を負わせ、根岸監獄に収監されました。英治は母親と一緒に弟と妹の手を引き根岸まで歩いて父親に面会に来たことが、自伝「忘れ残りの記」に書かれています。監獄橋（今の根岸橋）の東詰めには差し入れやがあって、母は父の好物を求めて面会の門をくぐりました。英治は母が帰ってくるまで、橋のたもとで弟と妹の面倒を見ながら待っていました。向こう岸の赤レンガの塀を眺めては、獄衣の父親の姿を思い浮かべていました。なぜ自分は罪人の子なのか、なぜうちはこんなに貧乏なのか、貧乏人はこんなに差別されるのか幼い英治にはわかりません。「忘れ残りの記」で英治は幼少の涙の日々を綴っています。

松山善三と高峰秀子

堀割川に沿った 16 号線の市営滝頭住宅の前の一部は、不自然に盛り上がっています。ここは明治時代から「ヘルム・ドック」という造船所があったところで、水門奥でダルマ船や小型の鉄船を造ったり修理していました。敗戦後このドックの跡地に大入産業という解体業者が入りました。

　この会社の社長が、ある日近所に「オレのうちに高峰秀子が嫁にくる・・・」とふれまわっので大騒ぎになった。社長の話は本当でした。何日かたって映画や雑誌でしか見たことのないデコちゃんが近所を挨拶して廻ったので、町内はびっくり仰天の騒ぎです。大入産業の次男が松山善三です。県立横浜三中（現緑ケ丘高校）から岩手医専に進みますが、医者の道からそれて列車やキャバレーのボーイ、編集者をしながらシナリオの勉強をし、映画製作の道に入るという異色の持ち主でした。

　松竹大船の木下恵介監督の秘蔵子として助監督をつとめましたが、誠実な人柄の逸才として知られていました。日比谷で靴磨きに靴を磨いてもらったとき、耳の障碍者同士が手話で小銭のやりとりをしている姿に衝撃を受け、こういう恵まれない人の映画をつくろうと決意して制作した第一作が「名もなく貧しく美しく」で、一躍新進監督として認められます。未来の婦人とは戦後最初のカラー映画「カルメン故郷に帰る」で助監督として初めて一緒に仕事をしました。といっても軽井沢の牧場で撮影中に、やたらに画面に放牧の牛が入ってしまい、それを追い払うのが仕事でした。「二十四の瞳」でやっとデコちゃんのそばで仕事をしましたが、それも自転車に乗れない「大石先生」が画面から消える時、自転車から落ちないようにそえるのが役目。それでもその頃から彼女のハートを射止めたのです。

美空ひばり

　この滝頭町に監督・大スター夫妻と並ぶ有名人として、大入産業の一つ隣の滝頭小学校近く、屋根なし市場の魚屋の娘が、銀幕や劇場で活躍した美空ひばりです。昭和 49 年の第一回広島平和音楽祭で、ひばりが歌った「一本の鉛筆」は松山善三の作詞でした。「あなたに聞いて貰いたい、あなたに読んでもらいたい・・・一本の鉛筆があれは、戦争はいやだと私は書く」　二人が音楽の世界でドッキングしたのです。葛城峻氏の「やぶにらみ磯子郷土誌」から引用しました。